

目的 米沢八丈は嘉永3年(1850)坂田五郎の創織によるが、本場八丈の場ちがいものとして扱われてきた。しかしその色柄の特有な庶民性は近來特に愛好され、米織の主要な位置を占めている。今般 明治以降のそれらの色柄の変遷について実物調査をした結果、その色柄の様相の変化は、社会から受ける条件がその要因となり、それに対応して変化しているのをみたので、その変化の様相とその要因について報告する。

方法 米織同業組合史その他文献、並に業者等に残存する資料調査及び比較研究。

結果 明.9.公債債による士族の内取は坂田創織の黄八等から始った。遠く丹波 会津 染織の下地をもつ士族の織る黄八は、織細且優雅であり、模裂品として最優秀とされ、隆盛をみたが 明.22~大正間は不景気と戦争で衰退過程をとった。昭.10.仲買人による模裂品の勧誘は初めての本場八丈の模裂だが、思八、真八、八端にも似て精巧であった。昭.16~18になると、戦勝と大陸の影響で 大柄銘仙縞が八丈の色柄になった。昭.18-22統制による指定織物となり八丈は消え、その色柄は細縞となって指定織の中に残った。戦後赤線区域の人産は粋な黄八にとびつきブームを起した。色柄は真黄に赤縞でまさに赤線模様である。これに対応して中間色の色黄八が街でブームとなった。併し33年赤線摩止と共に両ブームは終了し、黄八は茶味を濃くし不況時代に入る。38年工試により新加工法が考案され透明度の高い現在のものになり、47年の求評会は沖繩返遷の影響か沖繩緋の入る緋黄八が多く入賞した。この様に社会の変化の様相は 米沢八丈における色柄の変化の区線を明確にし、その要因となっていることを指示している。